# 第11回国際ボランティア ワークキャンプ in 英彦山(福岡)

11th International Volunteer Work Camp

報告書

世界の輪=Smile for One, Smile for All

## ～熊本から繋がろう～

2016年8月14日(日)～8月16日(火)

福岡県立英彦山青年の家

# Contents


02 目的／概略

03 スケジュール

04 基調講演
第１分科会「環境」

05 第２分科会「多文化共生」
第３分科会「国際交流」

06 第４分科会「child-rights～子どもの権利～」
第５分科会「食」

07 第６分科会「国際協力　医療保健」
全体報告会

08 未来職道
全体交流会

09 閉会式
お礼メッセージ

10 スマイルステーション
キセキの旅

11 アンケート報告

目的・概要

## 高校生、大学生等「若い人材」の「生きる力」を育む。

高校生、大学生等「若い人材」の「生きる力」を育む。

２１世紀の教育におけるキーワードを「国際」と「ボランティア」と位置づけ、高校生が日々の地域でのボランティア活動を点検しながら、自ら企画、運営するワークキャンプを、二泊の宿泊型で計画・実施しました。

本ワークキャンプへは63名の高校生、21名の留学生、そして7名の日本人大学生がサポーターとして参加しました。分科会活動等様々な活動をとおし交流、お互いを理解、「思い」を共有し、日ごろの生活の中で活かせるボランティア活動の取り組みに結びつけていくことができました。

第11回となる本年度のボラキャンは、例年、国立阿蘇青少年交流の家で開催していましたが、熊本地震の影響により施設及び交通事情等厳しい状況となり、開催自体を見送ることも検討しましたが、本年の1月から第11回実行委員会として活動してきた学生達のやりたいという熱い気持ちと、こういう時期だからこそやる意義があるのではないか、という思いから、県内外の施設状況を調査し福岡県の英彦山で開催いたしました。

今回のテーマは「世界の輪＝Smile for One , Smile for All ～熊本から繋がろう～」

震災により辛く悲しい体験をした今、プログラムを通して留学生や韓国の学生等と多くのSmile(笑顔)で繋がり、Smile(笑顔)になり最後にSmile(笑顔)で繋がる大会になればという思いが込められています。

概略

**・実施年月日**
2016年8月14日（日）～16日（火）
2泊3日

**・実施会場**
福岡県立英彦山青年の家
〒824-0721
福岡県田川郡添田町大字英彦山32-18

**・参加者**
84名
①一般高校生／実行委（EC）63名（44名／19名）
②留学生　21名

**・主　催**
国際ボランティアワークキャンプ実行委員会
(Executive Committee 以下EC)
※高校生の構成メンバーについては、
最終ページに記載。

**・構成団体**
株式会社近代経営研究所　熊本ユネスコ協会
株式会社リモナイト　熊本留学生交流推進会議
一般財団法人熊本市国際交流振興事業団

**・協力団体**
独立行政法人国際協力機構九州国際センター

**・後　援**
熊本県教育委員会、熊本市教育委員会、
熊本日日新聞社

## Schedule

### 8月14日(日)

9:00 八代駅前出発(専用貸切バス)
9:30 熊本市国際交流会館出発(専用貸切バス)
12:30 昼食
13:30 英彦山青年の家入所オリエンテーション
13:45 開会式
14:00 基調講演
15:30 全体交流会
17:00 夕べのつどい　夕食&入浴
19:00 分科会活動①
第1分科会　環境
第2分科会　多文化共生
第3分科会　国際交流
第4分科会　Child right ～子どもの権利と未来～
第5分科会　食
第6分科会　国際協力(医療保健)
21:00 終了
22:00 就寝準備
23:00 就寝

### 8月15日(月)

6:30 起床
7:15 朝の集い
7:30 朝食
9:15 ～ 17:00 分科会活動②
17:00 夕べのつどい　夕食、入浴
19:00 未来職道
21:00 終了
22:00 就寝準備
23:00 就寝

### 8月16日(火)

6:30 起床
7:15 朝の集い
7:30 朝食
9:15 報告会
11:00 クロージングミニ講演会
閉会式
退所オリエンテーション
12:00 昼食
13:30 英彦山青年の家出発
16:30 国際交流会館到着・解散

### 未来職道協力者

- **外国から来た子ども支援ネットくまもと「@ほ～む」**
  竹村朋子さん、西田淳基さん
- **熊本ユネスコ協会**
  橋本隆介さん
- **日本文理大人間育成センター**
  高見大介さん
- **Free The Children Japan 熊本**
  岩坂省吾さん
- **JICA九州**
  阿南栄子さん
- **アドバイザー**
  興梠寛さん (昭和女子大学教授)
  西尾雄志さん (近畿大学総合社会学部准教授)
- **事務局**
  白石昌隆、下田隆文 (KIF)

## 「基調講演」　興梠　寛氏（昭和女子大学グローバルビジネス学部特任教授、コミュニティサービスラーニングセンター長）

報告者：藤本　香織（文徳高校２年）

今回の第11回国際ボランティアワークキャンプでの基調講演では、興梠寛先生に「だれのために学びますか?」をテーマにお話しいただきました。このお話の中で私は特に二つのことが心に残りました。

まず一つ目は、「貧困」のことについて話されたことです。三秒に一人のひとが貧困で亡くなっているというのはとても衝撃でした。私は貧困について理解しているつもりでいましたがよく知りませんでした。自分自身のことにできず他人ごととしてみていました。興梠先生から「他人ごと」を「自分ごと」にするには体験し“感じる”ことが大切で、世界の人々の悲しみ、社会の困難を自分のこととして感じ、“貧困の罠“から目をそらさないでください」とおっしゃられて、私も高校生なりにできることを考え、実行したいと思いました。

二つ目は、グローバル社会では、厳しい問題が残っているということです。「希望なき世代」(The lost generation)と表現される未来に失望した“失われた若者たち”が引き起こすテロ行為などは彼らの人生もその被害者の人生も瞬時に奪い去ってしまうため、私たちは他人事と思わずに重くうけとめなければならないと思いました。

講演の後半はワークショップで会場を動いて楽しみました。このワークショップではボランティアについて「ボランティアをすることを友達にいうことは恥ずかしいか?」や、「ボランティアに参加するため学校で休日制度があるほうがいいのか?」などそれぞれの意見をみんなで意見交換できて楽しかったです。

今回の講演を聞いてボランティアについて多くのことを知ることができたとともにいろいろな視点からボランティアを見ることができて、ボランティアの世界が広がりました。学んだことを今後の活動にも生かしていきたいです。講演してくださった興梠先生ありがとうございました。

第1分科会 参加者14名

## 「環境」

報告者：田中　沙英（真和高校２年）

第一分科会では、4月14･16日に起きた熊本地震の時に断水し、水の大切さを身に染みて感じたことをきっかけに水についてみんなで考えました。

1日目は自己紹介とアイスブレイクで「人間知恵の輪」を行いました。みんな楽しんでくれて緊張はほぐれたようでしたが、名前を覚えるようなゲームにした方が良いと感じました。次に、1日の生活を振り返る中で水がないとできなくなってしまうことを挙げて、その結果どういった問題が起きるかをグループに分かれて話し合い、それぞれで発表してもらいました。すべてのグループで水は生命にかかわるものだと改めて実感してもらえました。

2日目はテーマ決めをした後に、世界の水事情を、スライドを使って説明しました。ライフストローと呼ばれるろ過装置のストローを使って水を飲んだり、20kgの水をリレー方式で運んだりしました。ライフストローを通すと変な味がしたけれど誰もお腹は痛くならなかったので、効果があることが分かりました。昼からは、水を節約するために日常生活でできることを話し合いました。「歯磨きのときコップを使う」「洗面器で洗顔する」など、多くの意見がでました。でた意見について実際に実践している人が予想以上に多く、驚きました。これからも続けてほしいと思います。さらに、世界の人々のためにしたいことを前日と同じようにグループに分かれて考え、全体で発表し合いました。ここでは、募金だけでなく支援や開発、教育の面で様々な意見をだしてもらいました。報告会に向けて2日間の活動を模造紙にまとめる際、私たちが特に指示をしなくてもそれぞれが助け合い、率先して動く様子を見られました。また、発表でも高校生と留学生が助け合う光景も見られて、大変感動しました。

私たちが生きてゆくうえで必要不可欠な水。身の回りのことだけでなく海外にも目を向け3日間話し合い、考え、新たな発見や知識を得られたことは良い経験でした。

相手に新たな知識を教える時に興味を持って聞いてもらえるようにするには、もう一歩努力が必要であったし、シュミレーションにも不十分な点が見つかりました。自分たちの未熟さを実感させられるものでした。

分科会活動を支えて下さったオブザーバーの方々や大学生スタッフ、そして積極的に取り組んでくださった参加者の皆さん、本当にありがとうございました。

## 第2分科会 参加者14名 「多文化共生」

報告者：史　興宝（鹿本高校２年）

多文化共生分科会は、8月14日から8月16日までの三日間で、「多文化共生」とは何なのかを自分たちで研究し、答えを導くことを目的として討論しました。

1日目は、「漢字あるある」を最初にしました。中国、日本と台湾3ヵ国の同じ漢字の違う書き方を比べてみました。皆は、違う国の漢字に興味津々の様子でした。次は、「リオオリンピック難民選手団とダブルの選手の活躍」について、そして最後は「多文化共生」について話し合いを行いました。導入として「国籍や民族などの異なる人々が、互いの文化的な違いを認め合い、対等な関係を築こうとしながら、地域社会の構成員として共に生きていくこと」を討論しました。参加者から、〈多文化〉・言語・肌の色・宗教・習慣、〈共生〉・互いの事を理解している・相互理解などのたくさんの意見をだしてくれました。時間が足りなかったので、翌日もこの話題について討論しました。

2日目の最初は、「多文化共生」についての続きをやりました。この話題をうまくまとめることができなかったのが私と田中くんの反省点です。次は牛尾佳子先生から「コミュニケーションの取り方」について教えていただきました。ECも参加でき全体的にとても盛り上がりました。その後、国(文化)の違いについて話をしました。パワーポイントを使ってクイズ7問を出題し、皆、真剣に考えてくれました。午後は、ECの池端君からの体験談を話した後に、「もしクラスの中で外国人の友達がいたらあなたはどうする?」について討論しました。「韓国、日本、台湾と中国の中学校の紹介」を行い、給食、体育館などが国によってあったり、なかったり違うことに驚きました。最後は、下川君から「僕ってなに?」があった後に、周さんによる「バリアを打ち壊せぇ!」について討論しました。

多文化共生分科会のECたちは、日本人向けのプログラムを多く作りました。内容は「海外に行ったらしたいこと、起こりそうなこと」、「模擬授業」などと考えていましたが本番の時は、外国からの参加者が想定していた以上に多くて、1日目全体的に終わった後に、ECと担当していただいた先生、大学生の方々と遅くまでプログラムの変更について話し合いました。色々ありましたが、たくさんの方々と話し合ってたくさん伝えられたのでよかったです。とても有意義な三日間過ごせて嬉しく思います。

## 第3分科会 参加者14名 「国際交流」

報告者：坂井　響（熊本高校２年）

第3分科会では、一日目にアイスブレイキングと三日目の日程説明を主に行いました。アイスブレイキングでは、自己&他己紹介、爆弾ゲームをしました。自己&他己紹介は、まず一人が自己紹介をし、その隣に座っている人は〇〇さんの隣に座っている〇〇です。というように、これまでに自己紹介した自分の前の3人の名前を言い、さらに自己紹介を加えるというものです。自分の番に回ってきた時に、「名前なんだっけ?」というように聞いたりし、打ち解けられていたようにみえました。さらに、前の人の名前を覚えてなければならなかったため、みんな静かに一生懸命に聞いていて雰囲気もよかったと思います。爆弾ゲームは、みんな楽しそうにしているように思えました。それから、日程説明を行いました。私たちの分科会は、留学生が8人いたため、通訳の方が数名いたので日程もきちんと伝わることができました。

二日目は一日目に出したテーマに沿ってそれぞれの国で話し合ってもらいました。話し合いで出た意見を付箋に書いて、ホワイトボードに貼り出しました。それから、付箋に書かれてあることを、書いた本人にインタビューして説明してもらいました。説明の後には、質問や自分たちの国との違いを発表してもらいました。その後に各国のゲームを体験しました。特にオーストラリアのカンガルーダンスは皆のお気に入りになりました。また、日本の文化(浴衣、折り紙、習字、茶道)も体験してもらいました。最後に動画に挿入する「We are the world」という歌を練習して動画を撮りました。

三日目は、二日目で作った動画や内容説明、参加者の感想を報告会で発表してもらいました。

三日間の分科会活動を通して自分たちの分科会テーマであった「交流」について理解することができたと思います。お互いにお互いのことを理解しようとすることが「交流」をすることで大切なことなんだと実感することができたと思います。

反省点は、すべての参加者にうまく伝わらなかったことで孤立させてしまった点です。何をすればいいのかなどが分からなくなってしまった人がいたので、なるべくECが散らばって情報を伝え、アドバイスをした方がいいと思いました。

## 第4分科会 参加者15名 「Child rights ～子どもの権利～」

報告者：山本　佳枝（信愛女学院高校１年）

私たちは毎日、学校へ行ったり、友達や家族と笑ったり、何気ない日々を送っています。時には悩んだり、喧嘩したり、自分は不幸だと思うこともあるでしょう。そんな時は、少し世界に目を向けてみてください。学校に通えず働いている子、友達や家族に恵まれず路上で物乞いをして生活している子、病気で長く生きられない子…世界には私たちよりも苦しい状況の中で必死に生きている子どもたちがいます。私たちに何ができるでしょう。それはきっと"考えること"です。少しでもそういった子どもたちのことを理解することが、彼らを助ける一番の手段なのです。そして、子どもたちに、守られるべき権利があることを知っていますか?

第4分科会「Child rights～子どもの権利～」はこの想いを参加者の皆さんと共有し一緒に考えることを目的に実施しました。

1日目、アイスブレイキングの後、子どもの権利に関する参加体験型学習を行いました。医療を受ける権利、教育を受ける権利に関する気づきは多かったのですが、障がい者の人権や子どもの権利条約の中の「子どもを育てる責任は、まずその父母にあります。国はその手助けをします。」という第18条についての気づきはあまりでませんでした。

日本においては就学援助家庭の援助や保育料の減免措置など所得に応じた国の手助けがあったり、また、ハローワークにおける仕事の斡旋など第18条が色々なところで考えられています。1つ1つを深く協議するところまではいたりませんでしたが、さまざまな意見を出し合い、みんなが資料をもとに子どもの権利について考えあったということにおいては導入として良かったのではないかと思います。

また2日目には前日ふれた子どもの権利条約の知識をもとに、ウェビングを行い、「子どもたちが守られない世界」というキーワードをもとに考えられる事柄を次々と出し、子どもの権利条約の4つの柱のカテゴリに分けていきました。しかしきれいに4つの柱に当てはめることはできず、様々な人の解釈によって違ってくることを感じました。

最終的に、Gift+issues=changeという式にあてはめ、個人にできる事、この分科会にできる事を参加者みんなで考えました。

2日間という短い期間で、子どもの権利を十分に学ぶには時間が足りませんでしたが、分科会で新しく出会った友人の皆さんと共に、少しでも子どもたちのことについて考える事ができました。そしてこの時間のなかでたくさんの笑顔がみられて本当に感謝しています。

## 第5分科会 参加者14名 「食」

報告者：森　友佑（熊本支援学校３年）

第5分科会では、「食」をテーマに、"食料自給率"、"輸入"ついて話合いました。

1日目は「仲間探しゲーム」というアイスブレーキングを行いました。参加者皆さんと楽しく霧気囲気を和らいだところで、それから、どうして食の分科会をしようと思ったかきっかけを話し、食料自給率に関するクイズを出して答えてもらいました。予想外に皆さんが食料自給率に関して知っていたのにはすごいなと思いました。その後、「国内の食料自給率がどの程度まかなえているか?」などについて3つのグループに分かれて話し合ってもらいました。話し合ってもらった意見として、「農地面積が圧倒的にアメリカや中国などの国々は広いから自給率も日本より多い」「日本の平均農地面積がとても少ないので食料を多く生産することが難しい」などの意見が出ました。

2日目は、まずフィナンシェという食べ物を題材に、材料がなにか、どこで生産されているかをクイズ形式で進めていきました。フィナンシェに使われている材料はほとんどが輸入に頼っている製品や穀物で、フィナンシェを食べてもらい、製品の材料を知ってもらうことで日本の自給率の低さを認識してもらいました。その後、63%の輸入に頼っている事について話し合いました。なぜ輸入するのか、なぜ日本の自給率は減るのか、輸入が止まってしまったらどうなるのかについて意見を出し合いました。「外国の物が安く仕入れられるから」「農業の後継者が不足している」「少子高齢者化のため農業の担い手がいなくなった」「日本の生産率が人口に対して少ない」「輸入が止まったら物価の高騰」などの意見がでて、食の大切さや自分の国で作ったものを食べることで自分の国の自給率を上げ、国を守ることにつながるというまとめとなりました。今回の活動を通して日本の食料自給率の低さを知ることにより輸入に頼りすぎず身近にできることを実践して自給率を高めていけたらいいと思いました。

「食」の分科会に参加してくださった皆さん3日間ありがとうございました。食の分科会に参加する前までは全然「食料自給率」「輸入」に考えた事もありませんでした。僕も、参加者の皆さんと一緒に学ぶ事が出来ました。僕もこれからはもっと食に関心を持とうと思いました。あと、皆さんと交流出来て楽しかったです。ECとしていい経験になりました。ありがとうございました。

## 第6分科会 参加者13名 「国際協力　医療保健」

報告者：橋本　摩耶（真和高校２年）

第6分科会では世界が抱える医療問題のひとつの感染症に焦点を絞り、「世界を感染症から救うヒーローになろう」というテーマで活動をしました。

1日目は、アイスブレイクのあと、感染症ときいて思い浮かぶことをあげてもらいました。最近のニュースでも取り上げられているからか、スムーズにいろんな意見を出してもらうことができました。それから、世界のさまざまな感染症についての病名当てクイズを行いました。難しいヒントを与えたのにも関わらず知名度の高い病気を答えにしたことによって、参加者の皆さんの興味をひくことができました。クイズ等を行ったことで分科会の中の空気も柔らかくなり、緊張が解けた様子でした。意見が出しやすくなったところで疑似体験を行いました。本来2日目にするはずでしたが、スケジュールが大幅にずれ、これ以降はすべてスケジュールにないプログラムで行うことになりました。

疑似体験では感染症が流行している発展途上国のA国と支援に積極的なB国の設定をもとに、A国を感染症から救うにはどうしたらよいかを考えました。まずは漠然としたイメージを書いてもらい、それから出たもののキーワードをまとめて「薬」「治療」「支援」の3つについて細かく考えました。「薬」については治療薬の得方やその研究、「治療」については治療法はどのようにするか、「支援」についてはA国が何を必要とするかをその都度意見を書いてもらいました。また、「支援」ではA国が支援を受けるばかりでなくA国のできることについてもECがヒントを出しながら進め考えてもらいました。自由に動き回って意見を交換してもらい、誰かに意見をみんなの前で発表してもらう形式を取り入れながら行いました。参加者が積極的に行う姿が見受けられ、ECとしても手ごたえを感じるようになりました。

2日目は、国際協力という分科会の大きなテーマを考えた1日目をふまえて、分科会を行う目的である「世界が抱える問題を他人ごとにしない」ということから「自分にできること」を考えました。たくさんの意見の中で自分にできることはこんなにあるのかと参加者は驚いた様子でした。

この3日間はECや参加者にとって忘れられない経験になったと思います。1人でも多くの人が世界の問題について興味を持っていただけたら嬉しいです。

最後になりましたがボラキャンに関わったすべての方に感謝いたします。

## 「全体報告会」

報告者：下瀬　真奈（熊本高校２年）

今回の全体報告会は実りの多いものになったと思います。

反省点を挙げるとするならばECのスケジュール配分だといえますが、その反省点にも皆さんに臨機応変な対応をして頂き、3日目のメイン活動としてふさわしいものになったのではないでしょうか。

全体の流れは、分科会ごとに5分間の発表を行い、その後3分間の質疑応答。そして、好きな分科会のブースを見て回る自由時間を設定し、自由時間の後は各分科会で集まり、報告会を通しての感想や報告会で出た新たな意見や提案を交換しあいました。最後は、ブースごとの写真撮影で締め、全体報告会は、和気あいあいとした雰囲気で終了しました。

今回私は、司会を務めさせていただきました。司会という立場上、全体報告会を主体的に行う側ではなく、どちらかというと客観的に全体報告会を見守る側でしたが、どのグループも活発に意見を出し合い交流し、参加者の表情も明るかったように思います。2日間の集大成ということもあり、どのグループの発表も内容の密度が濃く、実際に体験出来たり動画を作って流したりなどと、色々な創意工夫が分科会ごとにありました。様々な発表を聞いていると楽しいだけでなく、普段自分が関心を持つことがないような様々なジャンルについて知り考えることができ、私たちにとってとても良い機会になったと思います。

この全体報告会は、個人の意見や考え、さらには国境を超えた仲間の輪までもが広がった素晴らしい時間になったのではないかと思います。この経験が、少しでも私たちの豊かな未来、そして世界の平和な未来につながることを願っています。

# 「未来職道」

報告者：井手　さくら（第一高校２年）

ボランティアワークキャンプの二日目の夜、未来職道を行いました。未来職道は、自分が興味のある団体による貴重なお話を聞くことができます。

今回は、県外への会場の変更になった為、例年の未来職道とは内容を変更し西尾雄志先生指導のもと開催することになりました。まず、西尾先生から趣旨説明をしていただき、今回参加していただいたJICA九州国際センター・熊本ユネスコ協会・フリーザチルドレンジャパン熊本・日本文理大学・外国から来た子ども支援ネット・国際ボランティアワークキャンプ六つの団体のお話しを聞き、その後、各十五分×三回でのそれぞれのブースを周り、大人の方々の経験談を聞き、質問をし、最後に分科会毎で感想や気づいたことを発表しました。

今回は各団体には失敗をテーマにお話をしていただきました。

各団体の方々がどのタイミング、きっかけで今の道へ進むことになったのか、今の成功につながった反省点などを話していただき、質疑応答の時間をとりました。現在素晴らしい活動をしておられる先輩方の学生時代や失敗談などの身近な話題に、参加者たちは興味津々で聞いていました。参加者の中からは「"失敗"に対する価値観がかわった」「面白おかしく話をしてくれてわかりやすかった」などの声が上がり、分科会ごとの発表では留学生やインターンシップ生、日本文理大学などの留学生も発表に加わり、違う視点から見た良い意見を共有できたのではないかと思います。「誰でも失敗はするが、それをただの失敗にとどめておくのか成功に導くのかは自分次第」というお話があり、自分たちの普段の行動について深く考えさせられました。勉強や部活、学校生活などで失敗をする場面はたくさんあります。それをそのままに放っておいていては何も変わりません。その失敗の原因、解決策を考えることで次に向けて成長することができるのです。そして西尾先生からの最後のまとめでは、物語を用いたわかりやすいお話をしていただき、笑いありの楽しい貴重な経験となりました。

今回このような機会を設けてくださった事務局の皆様、そして各団体の皆様、ありがとうございました。

# 全体交流会

報告者：下川　嵩暉（熊本学園大学付属高校１年）

開会式後行われた興梠先生による基調講演終了後、体育館に移動し全体交流会を行いました。全体交流会ではいくつかのゲームを通してお互いの仲を深めていきました。まず、はじめに行ったのはバースデーチェンです。そのゲームのルールは自分と近い誕生日の人を探して、最終的に1月から12月生まれの人が一つの円になります。けれども、話すのは禁止です。そんな時、みんなは自分の方法で相手に必死に自分の誕生日を伝えます。その中でも、指で自分の誕生日を表す人が大多数でした。けれども、表し方は同じ人もいれば、違う人もます。それは、国、出身地方、個人の習慣によりとても多様でした。例えば、六を表す時、五本の指を上げた手と一本の指を足して六を表す人もいれば、親指と小指だけを上げて六を表す人もいました。このようにたくさん違う習慣を持つ人が集まっていても、最後にはきれいな円ができました。例え、それぞれの間に壁があったとしても、人が人に伝えたいと言う気持ちは壁を超える事ができると感じました。

二つ目はポニーです。それは、みんなが一つの輪になってから、周りの人は歌を歌って、輪の中に何人かの人がリズムに乗って踊りながらスキップしていきます。そして、音楽に合わせて止まって、止まった位置の前の人とダンスをし、ハイタッチしてから交代をするゲームです。最初の方はECスタッフが盛り上げていって、一般の参加者はちょっと照れくさそうにしていました。私はそれを見て緊張しながら歌っていました。だけど、後の方には信じられないほどみんな楽しんで踊っていました。私も緊張が解けECスタッフとして参加者と一緒になりとても楽しみました。

この二つのゲームは、国籍、言語、個人の習慣に妨げられることなく、みんな一つになって楽しんで笑顔になれます。みんなで楽しんで交流しているこの時、私はただ、「こんなのっていいなあ～。」と思っただけでした。でも、ボラキャンも終わり振返ってみると、このようなものは身近に沢山あると気付きました。例えば、スポーツは国籍に問わず誰もが楽しめられるから、オリンピックがあります。また、絵画の美しさは国籍、言葉関係なく全ての人が楽しめられます。終わった後で、参加者の緊張していた表情がこの交流会が終わった頃には和み、楽しんでいたのを見た時国籍や言語や人種が違っても楽しいものは共通なんだと発見しました。

# 「閉会式」

報告者：後藤智子（真和高校２年）

3日間の活動を締めくくる閉会式は、第一研修室で行われました。報告会が予定より早く終わり、15分早めての開式となりました。

閉会式の最初に各分科会の参加者の中から一人ずつ3日間の感想を発表してもらいました。「楽しかった」とか「いい経験になった」という感想だけでなく、「分科会活動がためになった」とか、「これからの生活にもいかしていきたい」という感想や、「これを機に、もっとボランティア活動に参加しようと思った」「来年ECをやってみたい」など前向きな感想が出ました。未来職道に対する感想もでました。発表の最後に私たちにありがとうと言ってくれた人たちもいてECをできてよかったと思いました。

西尾先生から講話と総評をいただいたあと、EC全員前に出てボラキャンの主題歌『キセキの旅』を第9回ECで大学生ボランティアの小田さんの指揮のもと参加者の皆さんにも立ってもらい、口ずさんだり、手拍子をしたりしてもらい合唱しました。練習時間があまりとれなかったというのもあり、完璧に歌えるECがすくなかったけど、とてもいい歌なので是非次回のボラキャンではみんなで合唱してもらいたいです。

そのあと、閉会宣言とみせかけて『happy』　にあわせてフラッシュモブを行いました。打ち合わせの時間があまり取れず、上手くいくか少し心配でしたが、多くの参加者の皆さんが一緒に踊ったりムービーを撮ったりと、盛り上がったので嬉しかったです。

そして本当の閉会宣言、施設の方からの挨拶をいただいて、閉会式を楽しい雰囲気で終わらせることができました。こうやって無事三日間の活動を楽しく終わらせられたのは実行委員長をはじめとするEC、大学生ボランティアの皆さん、支えてくださったオブザーバーの方々はじめ事務局スタッフの皆さんのおかげです。本当にありがとうございました!!

外国の人と交流したり、様々な高校の学生と3日間一緒に生活したり、分科会にわかれていろいろなことを話し合ったり、未来職道などで素敵な大人の皆さんの話を聞いたりといろんなことを経験して学べるこのボラキャンがこれからもずっと続いていってほしいです。

# 「お礼のメッセージ」

実行委員長：濱田ほの香（第一高校２年）

皆さんお久しぶりです。第11回国際ボランティアワークキャンプIN英彦山　実行委員長をつとめさせていただいた濱田ほの香です。

まず初めに第11回国際ボランティアワークキャンプに参加していただき本当にありがとうございました。2泊3日のボラキャン。皆さんにとってどんなボラキャンだったでしょうか?お友達はできました？各分科会の活動はどうでしたか？そして、皆さんの“Memory Of Summer Vacation”　トップ3にボラキャンはランクインしたでしょうか!?ランクイン…していたらいいなあ…。

さて、この第11回ボラキャンECは1月に本格的に始動しました。はじめは少ない人数でのスタートでしたが、最終的には19人のECでボラキャンを開催することができました。今年は4月の熊本地震の影響によりECもなかなか集まれなかったり、予定していた会場が使えない状況となったりと開催が難しいと思われましたが、ECのやりたいという思いと、ボラキャン実行委員会事務局である熊本市国際交流振興事業団のスタッフの皆さんのおかげで会場を福岡県の英彦山に移して開催することができました。

開催までの8カ月間を思い出すと、はじめはそれぞれのECが、学校が違うことでこれまで会ったことのない学生同士で、お互いのことを何も知ることがないままあっという間に5ヶ月が過ぎ、会議の進捗も悪く心配でしたが、震災後は毎週のように会議を重ねるうちに緊張が解けて和気藹々と会議を進めることができました。開催当日はスケジュールのとおりにうまく流れを作れず、初対面の参加者同士をどうしたら仲良くさせることが出来るのかなどの人を動かすことの難しさを考えるうちにへこんだこともありましたが、参加者の皆さんから、「3日間楽しかったです!」「ECかっこよかったです!」「来年ECしたいです!」との声を直接聞くことが出来たので凄く嬉しかったです。

来年ECをやってみたいと思っている高校生の皆さん、ぜひぜひ第12回ボラキャンのECしてください!もう大大大歓迎です!!

## スマイルステーション

報告者：橋本摩耶（真和高校２年）

スマイルステーション（通称スマステ）は、様々な高校の学生が集まり高校の垣根を越え、ボランティアの輪を広げるという目的のもと、高校生が自分達でできるボランティアを探したり、自分達で出来る企画を計画し実行するために、月に1回国際交流会館に集まり活動をおこなっています。

現在の活動としては、ボランティア情報の共有や、これまで行われてきた高校生目線で上通りを紹介してきた「上通なう」を発展させ「城下町なう」として地域をお城周辺まで拡大させ高校生による高校生の為の城下町マップ作成に取り組んでいます。今後、ツイッターやインスタグラム等高校生が気軽に見れるSNS等で情報提供できるようスマステ皆で情報収集に頑張っています。また、色々な団体と繋がり、様々な活動にスマステから参加できたらと思っています。誰もが参加でき誰もが集える場所になればなぁと思っていますので、興味のある方は気軽に会館に出向き参加してみてください。

## 国際ボランティアワークキャンプ「キセキの旅」

作詞：内尾 晶子さん　作曲：森下 公貴さん　編曲：岩坂 省吾さん

石ころは川に落ちていく
まだ見ぬ未知の世界へ
川の流れはとても速く
石を押し流していく

一人ぼっちの石ころは
旅の途中でたくさんの
石と出会ってぶつかって
重なり合って輝きだした

とんがっていた　心も
だんだんと少しずつ
まるくなって行く

ひとりひとり皆違う色で
誇らしげに輝いている

虹色の奇跡を起こそう

僕らみんなキセキになって
進んでいこう

今まではよく泣いていた
無力な自分が情けなくて
でもそれは当たり前だったんだ
一人じゃ何もできやしない

笑ったり怒ったりしていく中で
皆が気付かせてくれた
そんな素敵な仲間に
「ありがとう」って伝えたいんだ

今度はたったひとつ
自分だけの
大海原を目指していこうよ

ひとりひとり皆違う色で
誇らしげに輝いている

笑い合えばその笑顔で
もっと　僕ら
輝けると
（皆が僕に教えてくれたんだ）

ゆっくりでいいさ　皆で
広い海を目指していこう

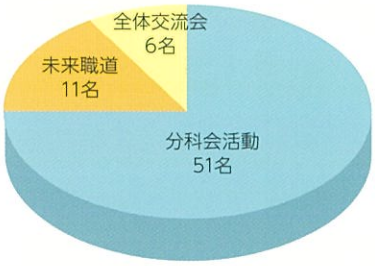
虹色のキセキを起こそう
僕らみんなキセキになって

進んでいこう

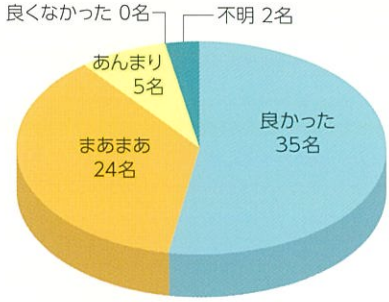
# アンケート報告

Questionnaire

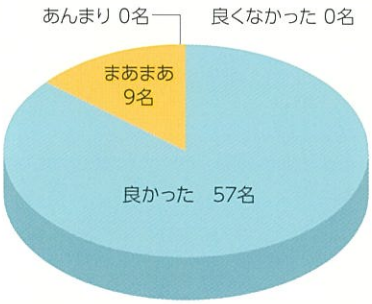
## Q1 一番印象に残った活動はなんですか？



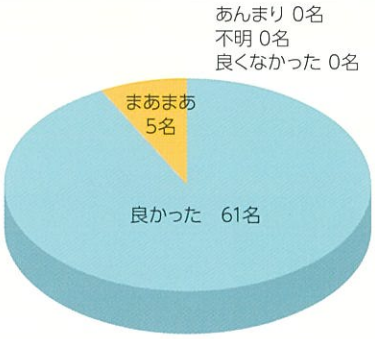

## Q2 基調講演はどうでしたか？



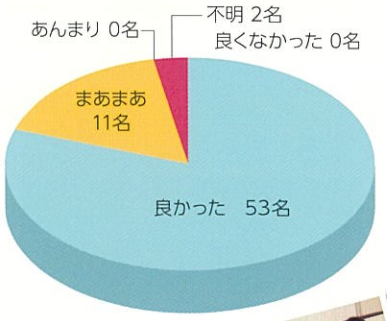

## Q3 全体交流会はどうでしたか？



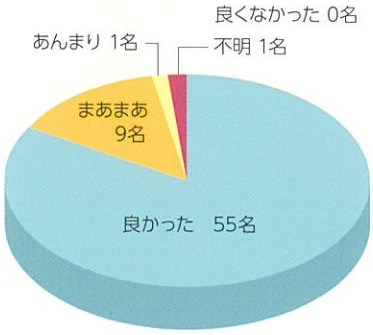

## Q4 分科会活動はどうでしたか？



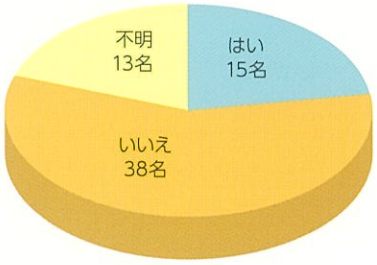

## Q5 未来職道はどうでしたか？




## Q6 実行委員の対応はどうでしたか？




## Q7 実行委員をしてみたいと思いましたか？



## アンケートのコメント

Q2
1. 自分が知らなかったことを知ることができた。
2. ボランティアの大切さや、やりがいを事前に知ることができた。
3. 難民についての TED のスピーチが印象深かった。
4. 分かれて意見の出し合いが楽しかった。
5. 講師の方からの話や映像が印象に残った。
6. このキャンプの主旨やモットーを知ることができた。

Q3
1. 言葉がなくても楽しむことができた。
2. 知らない人とも仲良くなれた。
3. 誰でも簡単にできるゲームばかりで楽しむことができた。
4. みんなで楽しむゲームでよかった。
5. いろいろな国の人とふれあえた。
6. 自分の分科会と協力しあえた。

Q4
1. 外国の人とも交流し、みんなで意見を出し合うことができた。
2. 興味のある内容を深く理解することができた。
3. 人数がちょうどよく、交流や意見発表ができた。
4. 実行委員を中心に、話し合いや活動がとても分かりやすく楽しかった。
5. いろんな人と話すことができ、またたくさんの知識も増えたから。
6. 自分たちができることを具体的に考えるきっかけになった。
7. 人のため、今の自分に何ができるか考えることができた。
8. 自分の今の生活がどれだけありがたいか考えることができた。

Q5
1. いろいろな団体の話を聞けて、とてもためになった。
2. いろいろな人の失敗談を聞くことができて自分も頑張ってみようと思った。
3. 実行委員の大変さや、ボランティア活動のことで知らなかったことをたくさん知れた。
4. 個々のブースに個性があり学ぶことがあった。
5. 自分が興味のある活動について話を聞くことができた。
6. 失敗に対する自分の考えが変わった。
7. 人生の失敗について学び、生きるヒントをもらえたから。

Q6
1. 分かりやすく、はっきりと分からないことを教えてくれた。
2. 緊張していたけれど、優しく話しかけてくれた。
3. 説明の仕方や活動の進め方をその場に応じて対応していた。
4. 的確な指示のおかげで、行動がしやすかった。
5. いつも笑顔で接していたし、とても話しかけやすかった。
6. 私たちをしっかりと引っ張ってくれて、とても親切にしてくれた。

## 第11回 国際ボランティアワークキャンプ実行委員会

### 高校生実行委員会メンバー

| | | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| (実行委員長) | 濱田ほの香 | 第一高等学校 | (副委員長) | (日置アンナ | 第一高等学校) | (副委員長) | 藤本　香織 | 文徳高等学校 |
| | 井手　咲良 | 第一高等学校 | | 吉田　華乃 | 第一高等学校 | | 緒方　七海 | 真和高等学校 |
| | 後藤　智子 | 真和高等学校 | | 田中　沙英 | 真和高等学校 | | 橋本　摩耶 | 真和高等学校 |
| | 坂井　響 | 熊本高等学校 | | 下瀬　真奈 | 熊本高等学校 | | 周　婷玉 | 熊本高等学校 |
| | 池端　誠也 | 秀岳館高等学校 | | 森　友佑 | 熊本支援学校 | | 山本　佳枝 | 熊本信愛女学院高等学校 |
| | 土橋　奈々 | 尚絅高等学校 | | 古閑　華恋 | 尚絅高等学校 | | 史　興宝 | 鹿本高等学校 |
| | 田中　大統 | 鹿本高等学校 | | 下川　嵩暉 | 熊本学園大付属高等学校 | | | |

構成団体
株式会社近代経営研究所、熊本ユネスコ協会、株式会社日本リモナイト
熊本留学生交流推進会議、一般財団法人熊本市国際交流振興事業団

協力団体
独立行政法人国際協力機構九州国際センター

後　援
熊本県教育委員会　熊本市教育委員会　熊本日日新聞社

事務局
一般財団法人熊本市国際交流振興事業団
熊本市中央区花畑町4番18号　熊本市国際交流会館
TEL：096-359-2121

平成28年度 子どもゆめ基金助成事業